

◆公開シンポジウム 2023年2月18日◆

演劇と抵抗： 48／イスラエルでパレスチナ人のナラティブを表現する取り組み

講師・対談

エィナット・ヴァイツマン

Einat Weizman

(劇作家、俳優、人権活動家)

通訳

渡辺真帆

(日英アラビア語通訳者・翻訳者)

解説

村井華代

(共立女子大学文芸学部・教授)

対談・註釈

鈴木啓之

(東京大学大学院・特任准教授)

閉会の辞・解説

新野守広

(立教大異文化コミュニケーション学部・教授)

5

主催：科学研究費学術変革領域研究 (A) 「イスラーム信頼学」 B03班
「紛争影響地域における信頼・平和構築」

(代表：石井正子立教大学異文化コミュニケーション学部・教授)

共催：異文化コミュニケーション学部

I. はじめに

鈴木啓之 (東京大学)

この報告では、2023年2月18日に立教大学池袋キャンパスで開催された公開シンポジウム「演劇と抵抗：48／イスラエルでパレスチナ人のナラティブを表現する取り組み」の内容を紹介する。この企画は、科学研究費学術変革領域研究 (A) 「イスラーム信頼学」の B03班「紛争影響地域に

おける信頼・平和構築」(代表：石井正子)が主催し、イスラエルの劇作家で俳優、人権活動家であるエイナット・ヴァイツマン氏を講師に迎え、渡辺真帆氏が通訳を務めた。また、村井華代氏(共立女子大学)によるヴァイツマン氏の紹介があり、後半の対談では私、鈴木啓之(東京大学)がモデレーターを務めた。

また、講演会の締め括りには、ドイツ語圏の演劇を専門とする新野守広(立教大学)が、2023年2月17日～2023年2月26日まで下北沢で上演されたヴァイツマン作の演劇『占領の囚人たち』と『I, Dareen T. (私は、ダーリーン・T)』についての解説を兼ねた閉会の辞を述べた。

ヴァイツマン氏による講演は、イスラエルの文化人が直面する危機と、芸術活動を通じた抵抗のあり方——ヴァイツマン氏自身はイスラエル人である自身がパレスチナ人に対して抵抗の望ましい「あり方」を指図することには批判的である——を示す稀有なものであった。パレスチナ／イスラエル紛争の当事国であるイスラエル国内で、パレスチナ人のナラティヴを語るヴァイツマン氏の活動は、当該地域における信頼醸成に示唆を与えるものであった。

II. ヴァイツマン氏の活動について

村井華代(共立女子大学)

共立女子大学の村井華代と申します。専門は西洋演劇の理論なのですが、2012年からイスラエルに通っており、エイナットさんのことは、とても有名なイスラエルの演劇人としてずっと知っていた、というご縁で呼び頂きました。エイナット・ヴァイツマンさんについて、少しご紹介させていただきます。

エイナット・ヴァイツマンさんは、1973年イスラエルのハイファという、アラブ系の市民とユダヤ系の市民の共存で知られる町で生まれました。お父さまとお母さまはドイツからイスラエルに移住されてきた方で、お兄さんは、エヤル・ヴァイツマンという建築家でロンドン大学の教授をしている著名な方です。

このエイナット・ヴァイツマンさんについて私が知った契機からご説明したいと思います。2017年、今回、下北沢で上演されております作品の中で言及されている事件が起きました。当時の文化・スポーツ大臣が彼女を名指しで非難したために、エイナットさんは私が毎年通っていたアッコー演劇祭から排除されました。日本だと、現役閣僚が個々の演劇人に何かするとは考えづらいのですが、それが、イスラエルの国論を二分し、イスラエル演劇界が分断されてしまうほどの大きな騒動に発展しました。日本でも2019年に、あいちトリエンナーレの事件があり、国家と芸術の関係がこんなに問題になるということに驚かれた方も多いと思いますが、イスラエルでは割とよくあることです。しかし、エイナットさんの場合は、ちょっとレベルが違ったと思います。

エイナットさんは兵役を務めた後、テル・アヴィヴ大学で、領域横断的芸術の学位と、カルチュラルスタディーズ・演劇・政治的コミュニケーションで三つの修士号を取得され、絵本の原作も手掛けるなど知的で多彩な活動をされていましたが、それでも普通の女優さんでした。1992年からテレビや舞台での活動を始め、そして1999年、イスラエル人はみんな知っているという大ヒットコメディ『おばあちゃん作戦』に出演され、大変に有名になりました。舞台でも2009年、先ほど私が言及しましたイスラエル北部のアッコーという町で毎年開催される演劇祭で、最優秀女優賞を獲得しておられます。

2012年くらいから彼女の活動に、段々とアラブ系の方とのコラボレーションが現れてきますが、やはり彼女のキャリアの中で、大きな転機になったのが2014年かと思います。この夏にガザ侵攻がありました。その時に、パレスチナの旗がプリントされたシャツを着た彼女の写真がいきなりネットにアップされ、「こいつは裏切り者だ」というネットリンチが起こりました。このことも今回の舞台の中で語っていますが、その後から、彼女は明確にアクティビストとしての活動をするようになります。2015年の『シェイム(恥)』という作品は、イスラエルで普通に生きていることの恥の自覚に基づくもので、ムラード・ハサンというアラブ系の俳優と、2人がそれぞれのモノログ劇を演じる形で上演されました。この作品から劇作、演出、主演を兼ねた舞台をつくっています。

2017年のフェスティバル／トーキョーに招かれた、渡辺真帆さん翻訳の『パレスチナ・イヤーゼロ』は、アッコーの2016年の演劇祭でエイナットさんの作・演出で上演されたものでした。私は現地でご覧しましたが、この作品で描かれていたのは、土地鑑定士の目から見た、西岸の土地収奪と家屋破壊の現実です。皆さんもご存じのように、イスラエルは入植地を広げる過程で、そこに元から住んでいるパレスチナ人の家やオリーブ畑をつぶして無理やり土地だけ奪っていきます。抵抗すると逮捕する、ひどい場合は殺す。そのような現実に対する怒りを描いた作品です。東京でご覧になった方もいらっしゃると思います。

しかし、2016年に上演されたこの作品について、とあるイスラエルの「ネトウヨ」のような人が、こんな作品に税金を出すのか、とわざわざ文化・スポーツ大臣ミリ・レゲヴにご進言に及んだ。このミリ・レゲヴ大臣は、カンヌ映画祭にエルサレムを描いたドレスを着て出てきて話題になった非常に強硬な保守系の政治家で、軍にいた時代には検閲官を担当していました。その方がエイナットさんをマークし始めたのです。2017年、エイナットさんは新作『占領の囚人たち』をアッコー演劇祭で発表することが決まっていたのですが、演劇祭の主催であるアッコー市の市長が政府の意向を受けて「この作品は上演させない」と言い出したのです。

結局、この作品はアッコーでは上演されませんでした。しかし、これに抗議した演劇祭の芸術監督ギブソン・バル・エルが辞任、元芸術監督で著名な演劇学者でもあるシモン・レヴィなど演劇祭の実行委員団のほとんどが共に辞任、多数のエントリーの中から選ばれたコンペ参加劇団も辞退して、開催三カ月前に演劇祭の主役たちが「そして誰もいなくなった」という大事件になってしまいました。最終的には、この演劇祭の基盤であり事務局でもある劇団アッコー・シアター・センターの代表モニ・ヨセフが監督になり、代わりに出てくれる劇団を集めて開催はしたのですが、お客さんはガラガラ、雨は降るしでその年のアッコー演劇祭は悲惨な結果になりました。

しかし、エイナットさん自身は、アッコーでの騒動とは別に、着実にご自身の演劇活動を続けていました。その中でも大きかったのが、ダーリーン・タートゥールとの出会いから生まれた『I, Dareen T. (私は、ダーリーン・T)』です。これはヴァイツマンさんが、イスラエルの監獄に収監されているパレスチナの詩人ダーリーン・タートゥールの物語を、彼女になり代わって語るという一人芝居です。このダーリーンとの友情によって生まれた舞台が今回、日本での上演では『占領の囚人たち』と組み合わせられて上演されています。

2019年、ついに『占領の囚人たち』がイスラエルで初演されます。これは理不尽な理由で捕らわれてしまったパレスチナの囚人たちが、イスラエルの監獄の中で一体どのような目に遭っているかを描くセミドキュメンタリーです。実は、イスラエルの一般の人は占領の現実をほとんど知りません。例えば、西岸に行くのはほとんど宇宙に行くような感覚、とイスラエルに住む友人に言われたこともあります。一般の国民の知らない、別の、全く隠された世界がある、それを彼女

が、演劇の舞台を通じて人々に示していく。それは、当然ながらイスラエルの政府にとっては、やってほしくないことです。ですから、右派からの彼女に対しての嫌がらせも続いています。しかしながら、全くそれにひるまなかつた。それが彼女の素晴らしいところだと思っています。

2022年11月の選挙の結果、イスラエルの歴史上類を見ない極右のとんでもない政権が発足しました。私もそのとき本当にどうしようと思いましたが、まずしたのは彼女のFacebookを見るということでした。彼女は、とても落ち着いていました。彼女の旦那さんが「イスラエルから逃げようかと思ったけれど、僕の妻がとても落ち着いている、だから僕もここで頑張る」と書いていました。それで私は、まだイスラエル演劇を研究していてもいいのだなと思いました。

エイナットさんのホームページ、こちらにURL (<https://www.einatweizman.com/>) を挙げてあります。それぞれの作品の事情が全て書かれていますので、ご覧頂ければと思います。

III. エイナット・ヴァイツマン氏講演「演劇と抵抗」

講師：エイナット・ヴァイツマン（劇作家・俳優・人権活動家）

通訳：渡辺真帆 註釈：鈴木啓之

1. 事の顛末

今日はお招き頂き、ありがとうございます。では、まず、事の顛末からお話しします。

時はイスラエル総選挙が迫る2022年10月、場所はイスラエル最高裁での出来事です。バラド党に対する訴訟が行われていました。バラド党というのは、イスラエルの政党のなかで最もラディカルなパレスチナ系の政党です。総選挙が行われるたびに、このバラド党の出馬を禁止しろという動きが起こります。なぜならバラド党はイスラエルの中で唯一、ユダヤ人だけの民主主義国家という現在の体制を、全市民のための国家に変えようと取り組む政党だからです。党首は眼鏡を掛けている人物サーミー・アブー・シャハーダです〔スライド1の写真の左から2番目〕。右



スライド1

端にリスト第6位の私も映っています。

この裁判の訴状では、バラド党の出馬を禁止すべきポイントが挙げられていました。そのうち、第24項と第25項が私に関するものでした。特に第25項では、「エイナットは近年、彼女の芸術活動をパレスチナ人のナラティヴ、それから彼女の言葉で言う占領に関することにフォーカスしている。その中には、『占領の囚人たち』という演出作品があり、この作品は治安あるいは安全保障上の脅威である囚人と共に書かれたものであり、アッコーの演劇祭で上演禁止となっている。また最近では、『革命のつくり方』というドキュメンタリー演劇を制作しており、今作品は、イスラエルに逮捕されたパレスチナ人の活動家、イーサー・アムルの裁判を扱うものである」と書かれていました。私の演劇作品が、パレスチナ人政党の選挙参加を禁じる理由にされたのです。結局のところ、この訴訟は裁判所に退けられ、バラド党は選挙に参加することになりました。しかし、最低得票率¹にはわずかに及ばず、議席を得ることはありませんでした。

なぜ、ユダヤ人で演劇人である私が、パレスチナ系の政党の候補になったのでしょうか。ちなみにですが、バラド党からユダヤ人の候補者が出たのは、私が初めてのことでした。なので、非常に驚きを持って受け止められ、メディアでも大きく取り上げられました。この疑問への答えは、端的に言うと「演劇」です。

2. 一枚のシャツを着たことが人生を変えてしまうとは……

さあ、時代を少し遡りましょう。

私がかつて、そうですね、だいたい1995年～96年頃から、イスラエルで人気のテレビドラマや映画に出演し、芸能人として喝采を受けていました。2006年のことです。妹がデモに出かけ、「FREE PALESTINE (パレスチナに自由を)」とプリントされたシャツを着て戻ってきました。彼女にはサイズが小さかったらしく、「あげる」と言われました。着るかどうかわからなかったのですが、とりあえずもらいました。私はスローガンが書いてある物はあまり着ないのです。でもある日、「そうね、着てみようかな」と思いました。当時は、こういったパレスチナの国旗が付いている物をテル・アヴィヴの路上で身につけていても大丈夫だったのです。このシャツを着たことが、私の人生を永遠に変えてしまうとは、全く想像していませんでした。

私はこのシャツを着ました。友達に会いに行ったのです。そこでパパラッチに写真を撮られて、ネット記事になりました。少しヘイト的な書き込みがあったぐらいで、当時は大きなことにはなりません。この写真があらためてネットに投稿されたのは、2014年のガザ攻撃²のときでした。1カ月の激しい侵攻の最中、たくさんのデモが行われました。テル・アヴィヴの私が住んでいるところの近くにハビマ広場という、よくデモが行われている場所があるのですが、そこではハマス³やパレスチナに対して激しい抗議デモが行われていました。ガザを地球上から消し去る、そのような雰囲気での激しいデモでした。でもハマスやパレスチナだけではなく、内なる敵も探し出されたのです。そこで、私の2006年の写真があらためて注目され、映画への出演をやめさせろという声があがりました。

このSNS投稿が何千回とシェアされ、私はネットリンチに遭いました。殺人予告だとか、レイプの脅迫だとか、醜悪で手の込んだ類いのヘイトを受けました。また、俳優として知られていたこともあって、道端でも怒鳴られたり、脅されたり唾を吐かれたりしました。あの頃の数カ月は一人では出歩けない状態で、仕事に行くとき、娘たちの幼稚園の送り迎えをするときも、友達に付き添ってもらわなければなりません。

深くショックを受けましたし、非常に怖かったです。この出来事をなんとかやり過ごし、私は

決心しました。私は表舞台から追い出されていき、自分のマネージャーからも二つに一つであると言われました。メディアで謝罪文を出すか、もうオーディションには参加しないか、であると。私はキャリアを失いました。

3. 演劇作品『シェイム（恥）』と『パレスチナ・イヤーゼロ』

私は、この体験をすべて舞台にすることを選びました。そして生まれたのが、2015年の『シェイム（恥）』という作品です。

この作品で取り扱った題材は、芸術と政治の交差です。自分の意見のために代償を払わされるということを、自身の体験をもとに問いかけました。また、共演をお願いしたムラード・ハサンという、48年地域⁴のパレスチナ人の俳優も、自身のアイデンティティのために代償を払ってきました。彼にもモノログをお願いしたのです。彼は、48年地域のパレスチナの劇場で『パラレルタイム』という演劇作品に出演していました。この作品がワリード・ダッカという非常に有名な政治囚の書いた本を原作にしていたので、劇場自体が閉鎖に追い込まれてしまったのです。

この『シェイム（恥）』という作品は、政治的な演劇として大変な成功を収めました。イスラエル国外でも数カ国を巡業しました。もっと演劇を世に送り出したいという意欲が私のなかに芽生えてきました。そもそも、俳優としての芸能活動は続けられそうにはなかったので、私はアクティビズムの舞台を演劇へと変えました。ユダヤ人であり白人であるという自身のイスラエルでの特権を使って、イスラエルによるパレスチナでの植民地化計画の実態と罪を公のもとに晒そうとしました。

私の次の作品『パレスチナ・イヤーゼロ』では、いわゆる「ナクバ法」を扱いました⁵。「ナクバ」というのは、イスラエル建国時の1948年にパレスチナ人に起こった大災厄を指す言葉です。ナクバ法は、このイスラエルの独立記念日である日を、悲しみの日として表現したり企画を行ったりする団体から、公的資金を引き上げることが定められました。国や国の象徴を傷つけるものを禁止する、助成を出さないということです。私は、繰り返されるナクバを演劇で描こうとしました。構想としては、1948年から現在に至るまで、48年地域やガザなどの67年地域⁶で続けられている家屋破壊を通してナクバを見つめるというものでした。比喩的に言えば、イスラエルはパレスチナという存在を、パレスチナ人の家屋と同じように破壊しています。台本を書くにあたって、私は破壊された村を訪れたり、家を失った人に話を聞いたり、ガザからの証言を読んだりといったリサーチをしました。そうした中で、その後も連絡を取りあうことになる仲間ができました。

作品の稽古が最終盤にさしかかったところで、当時の文化・スポーツ大臣ミリ・レゲヴが、この作品がナクバ法に抵触していないかどうか確認するために職員を2人派遣したいと言ってきました。結局、レゲヴは上演を止めることができませんでした。稽古の見学も拒否しました。文化・スポーツ大臣には、法的に上演を禁止する権限がなかったのです。ただ財務省だけが、そうした権限を持っていました。そこで、レゲヴは、新法「文化における忠誠法」の策定に乗り出します。

紆余曲折ありましたが、『パレスチナ・イヤーゼロ』は成功を収めました。主演のジョルジ・イブラーヒームというパレスチナ人俳優は、アッコー演劇祭で最優秀俳優賞を獲得しました。上演継続間違いなしと期待したのですが、レゲヴの追従者たちが作品上演の妨害を始め、ついに上演を停止に追い込んでしまいました。イスラエルの宝くじ財団からアラブ系市町村での上演に向けて助成金の内定を得ていたのですが、私たちが公演をする予定の市当局に財団のトップが介入する形で、他の演出家の作品を2つ提供するので、『パレスチナ・イヤーゼロ』は上演するなど

圧力をかけました。これで、私たちは国内で上演が続けられなくなってしまいました。

『パレスチナ・イヤーゼロ』の制作過程で得た何にも代えがたいものとして、仲間を得たことを先ほどお話ししました。その一つがアル＝アラキーブというベドウィンの村とのつながりです。想像を絶することですが、この村は今までに213回も破壊され、その度に建て直されています。私はこの村の人たちとアートプロジェクトを今も続けていて、テル・アヴィヴやジャッファ〔ヤーファー〕などのイスラエルの都市で一緒にパフォーマンスをしたこともありますし、アーティストを村に連れて行ったり、ということをしています。この村での活動について、残念ながら今日は詳細には立ち入りません。演劇についての話を続けたいと思います。

4. 演劇作品『占領の囚人たち』

『パレスチナ・イヤーゼロ』の公演が続けられなくなってから、私はアッコーの演劇祭に『占領の囚人たち』という作品を新たに応募し、上演が決まりました。なぜ政治囚のことを作品にしようと思ったのか、お話ししたいと思います。ご覧頂いているスライド2の写真の中央に写っているのは、バラド党所属のバーセル・ガッターズという人物です。バーセルのもとを、バラド党のメンバーと一緒に訪問したときに撮影しました。

バーセルはこのとき、刑務所の囚人に、密かに携帯電話を渡していたことで逮捕され、自宅軟禁中でした。この携帯を渡していた相手というのが、先ほど少しだけ名前を出したワリード・ダッカというとても有名な囚人であり作家でした。



スライド2

家族やバラド党員を前にバーセルが話をするなかで、私は初めてパレスチナ人の囚人がどのような状況に置かれているのかを知りました。囚人のワリード・ダッカが描いた絵を見せてもらったり、彼が書いた手紙を読み上げてもらったりして、振り返れば本当に無知だったと思いますが、私はとてもショックを受けました。というのは、イスラエルのメディアからでは全く伝わってこない、全く聞いたことがない話で、なぜ政治囚のことをこんなにも知らなかったのだろうという

ことに、愕然としたのです。

パレスチナ人の政治囚たちは、イスラエルによる占領の最も姿の見えない犠牲者だと言えます。イスラエルあるいは国外の人たちにとって、占領というのは分離壁のことであったり、検問所であったり、兵士によって知覚されますが、パレスチナ人にとって占領を最も感じるのは囚人です。イスラエルは囚人たちの全員を「テロリスト」であると言って、存在を覆い隠しています。刑務所の中にいる囚人は、本当に多種多様です。武力闘争に従事した人の他にも、非暴力闘争にかかわった人、ジャーナリスト、ブロガー、詩人、Facebookに何か投稿しただけの学生などがいます。そうした政治囚をすべて一緒に「テロリスト」とすることで、イスラエル人の共感や同情から遠ざけています。

この作品はとても大きな挑戦でした。私は刑務所の中には入れないですし、電話もできない。だからこそ、バーセルは携帯を持ち込もうとしたわけです。囚人と隔離した状態でどうやって作品を書けば良いのかと逡巡しました。そこで思いついたのは、刑務所からの手紙が取っ掛かりになるんじゃないかということです。ほんの一部だけヘブライ語が混ざっていましたが、ほとんどがアラビア語で書かれた大量の手紙を集めて、刑務所や囚人の現実を伝える作品を完成させました。この作品でアッコーの演劇祭に応募し、上演が決まったのです。

5. 上演禁止

ところが、芸術監督からWhatsAppで「ヴァイツマン、今回は無理だ。あとで話す」とメッセージがありました。何があったのかテキストを返したり、電話したりしましたが、そのまま連絡が付かなくなりました。アッコー演劇祭のプログラムが記者発表されたときに、『占領の囚人たち』が政治的な理由で上演禁止になったようだわかりました。上演禁止にしたのはアッコーの市長で、その理由は市内で混住しているユダヤ人とアラブ人の繊細な関係を害する恐れがあるからということでした。村井先生にご紹介頂いた通りですが、これでこの年のアッコー演劇祭は潰れました。参加を予定していたアーティストや監督、さまざまな委員会、他の関係者がみんな参加をボイコットし、大荒れの様子がメディアで過熱気味に取り上げられました。

メディアでの論争は過熱し、この出来事自体が私の演劇作品、芝居なんじゃないかとさえ思うようになりました。いろんな記事で、囚人たちが政治囚なのか、あるいは社会を脅かした罪人なのか、そういった議論が展開されました。これだけ多くの観客に届くような作品を、私はもう作れないだろうと思います。

事態が大きくなってしまい、ミリ・レゲヴ文化・スポーツ大臣は上演禁止の理由を説明しなければなりません。レゲヴは、これは検閲ではないが、ヴァイツマンはテロリストを称賛していることから上演禁止にしたと言うのです。これが、実際の発言です。

(要約)

こういった争い事にはうんざりしています。エイナット・ヴァイツマンは、血みどろの殺し屋テロリストを礼賛し、ラーマッラーのムカーターア〔パレスチナ自治政府大統領府〕のために活動をしています。テロリストたちは、ユダヤ人という理由だけでわが国の兵士や老若男女を殺しているんですよ。そんなテロリストを称賛するような作品に、公的な補助を出して良いとでも言うのですか。

さて、2014年の出来事〔シャツ写真の拡散とネットリンチ〕で、今度は政府とは別の方向から

攻撃を受けるようになりました。ミリ・レゲヴが私をテロリスト擁護者であると繰り返し言ったことで、世論が沸き立ちました。テロリスト擁護者であることは、時にテロリストそのものであるよりも悪いことなのです。私はまたいろいろな脅迫やヘイトを受けるようになりました。レゲヴ大臣が言うのだから構わないだろうという感じです。娘たちが少し大きくなっていましたので、家族のことが心配でした。実際に、学校では、娘たちがいじめを受けるようになってしまいました。

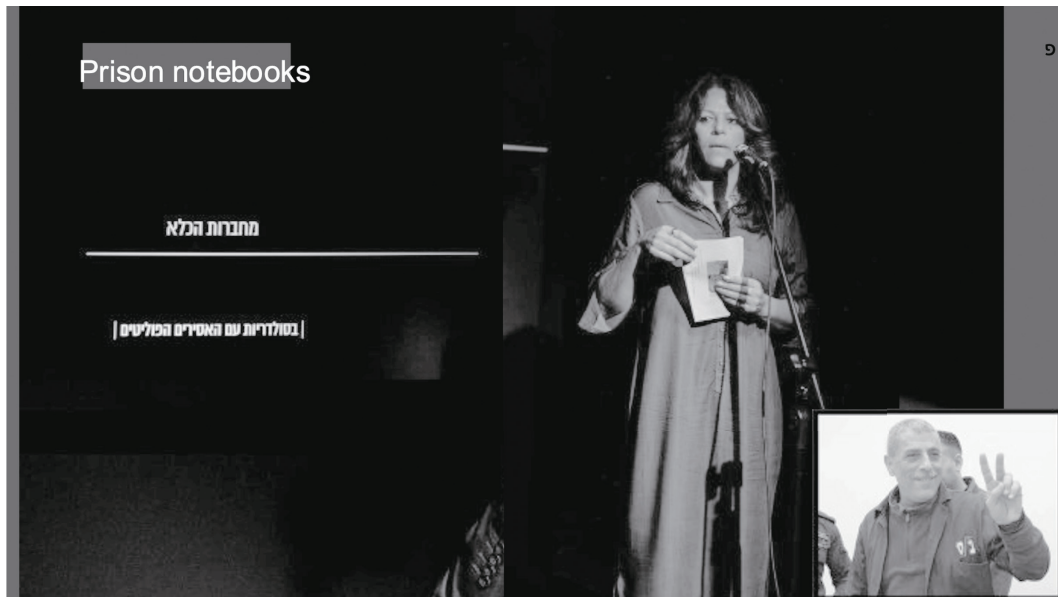
『占領の囚人たち』をなんとか上演できないかと、いろいろな劇場を訪ね歩きました。アーティストや芸術監督は、私を支持するとか、頑張れと言ってくれました。でも、劇場が閉鎖されてしまうということを恐れて、上演を受け入れてはくれませんでした。

6. 囚人を演劇の主題に据える

こうやって上演禁止にされたことで、『占領の囚人たち』の主題が私にとってより重要なものになりました。まるで自分の手に燃える炎を持ったかのような行為でしたが、どうにかして起こったことを発信しなければいけないと思うようになりました。ジャッファ劇場の館長に、『『占領の囚人たち』はやらない。代わりに囚人の手紙を紹介する何か別の企画をやりたいから、一晩だけお願い』と頼み込み、OKをもらいました。

この1回限りのイベントを、私は『刑務所のノート』と名づけました。芸術関係者に、参加してもらいました。スライド3の写真で手紙を読み上げているのは、先ほどから時折名前を挙げている囚人ワリード・ダッカの連れ合い、サナーさんです。サナーさんは、将来生まれてくる自分の子どもに宛てたワリードの手紙を読み上げました。

当日の様子は、私のホームページ [<https://www.einatweizman.com/>] から動画で見ることができます。他にもいろいろな芸術関係者に参加してもらい、ヘブライ語に訳した刑務所からの手紙を15本読み上げ、スクリーンには手紙の写真を投影しました。



スライド3

この1回限りの『刑務所のノート』は、上演禁止になった内容への関心もあって、お客さんが溢れ返るような盛況となりました。大成功といってよいでしょう。この企画には、先ほど言及したパーセル・ガッターズも参加しています。自宅軟禁を解かれ、2日後には2年の刑期で収監されることが決まっていた。パーセルは、ヘブライ語でお別れのスピーチをしました。この成功を聞きつけて、アクティビストの人たちから、もう1回、別のある囚人を取り上げたイベントをジャッファ劇場でやらないかと持ち掛けられました。その囚人とは、ダーリーン・タートウールのことです。

ダーリーン・タートウールはパレスチナ人の詩人で、Facebookに自作の詩を投稿して逮捕されました。私は「もちろん喜んで上演をやりましょう」と応じ、彼女にも会いたいと希望しました。当時、ダーリーンは自宅軟禁中だったのですが、裁判所から数週間に1回、保護者と一緒に出出が許されている状況でした。ジャッファに来てもらい、初めて会ったのがスライド4の写真のときです。



スライド4

私は「イスラエル国家は詩人ダーリーン・タートウールに反対する」という企画を立ち上げました。この企画では、彼女の裁判記録を俳優たちが読み上げることになっていました。これが当局の機微に触れました。このたった一つの企画を理由に、ジャッファ劇場は1週間にわたって閉鎖されました。次頁のスライド5は、「テロへの助成をやめろ」というイラストで、劇場に対するデモを呼びかけるものです。劇場の上の封筒からテロリストが這い出す絵になっています。

ジャッファ劇場が1週間の閉鎖に追い込まれてから、国はこの劇場でかかる全作品、全企画をチェックすると言い始めました。アーティスト側からは、劇場を擁護するたくさんの抗議デモが打ち出されました。演台が設けられて、スピーチも実施されました。でも、私はそこに招かれませんでした。イスラエルのアーティストというのは、たいてい左派リベラル系ですが、極左というわけではありません。彼らが訴えていたのは表現の自由であって、パレスチナ人の権利のことではありませんでした。だから、私は招かれなかったのです。自分の企画で劇場が閉鎖に追い込



スライド5

まれてしまい、もうここで自分のキャリアは終わってしまったと、孤独感に苛まれました。

7. ワリード・ダッカの手紙

絶妙な時期に、囚人ワリード・ダッカから私に宛てた初めての手紙が届きました。それが私を動かしたのです。ワリードのことを、本当にいろんな所で聞いていたので、心を動かされました。彼はとても美しい文章を書くのですが、『刑務所のノート』の時に] 劇場で読み上げた手紙の大半が彼の手紙でした。その本人から私宛てに手紙が来て、やりとりが始まりました。刑務所のなかに新しい友だちができたのです。手紙で話す内容は、だいたいが芸術のことでした。ワリードは、今書いている本とか小説の話をし、私は自分の演劇の話をしました。ある時、私は勇気を振り絞って、私の演劇『占領の囚人たち』に一幕を書いてくれませんかとお願ひしたのです。

もう『占領の囚人たち』は上演できないと思っていました。自由に使える時間ができて、台本のための調査をして、いろんな人や元囚人に会うことができました。こうしているうちに、囚人の手紙を刑務所の実態を見せる窓にしようという当初のアイデアがまったく見当違いであったことに気がつきました。手紙は全て治安当局に読まれているのです。なので、手紙では現実はわからない。そこで、刑務所から出てきたサバイバーから話を聞いて、その人たちの記憶から刑務所内で何が起きているのかを再構築するしかないと考えました。

次頁のスライド6の写真をみてください。これは〔パレスチナ暫定自治政府の〕囚人問題担当大臣が、武力闘争に従事し、30年以上にわたって服役した元囚人たちとの面会をセッティングしてくれたときの様子です。同じような人たちと、ひたすら面会を行いました。こうして、私はX氏に出会います。彼は48年地域出身の元囚人です。48年地域に住んでいる彼とは、検問所を越える必要もなく、頻繁に会うことが可能でした。私たちは友達になり、1年から1年半の間、週に数回ほど会って、一緒に台本を書いていきました。

X氏はいま仮放免中の身分なので、ここでは名前を伏せています。彼も武力闘争に参加し、



スライド6

30年近く収監されていました。私たちは友だちになりましたが、これは私にとってとても重要なことでした。私は、人を題材に書くことはしません。その人と一緒に書くということをいつも大事にしています。だからこそ、友情が芽生えることが必要でした。そこに希望があると私は思っています。

8. 『I, Daren T. (私は、ダーリーン・T)』

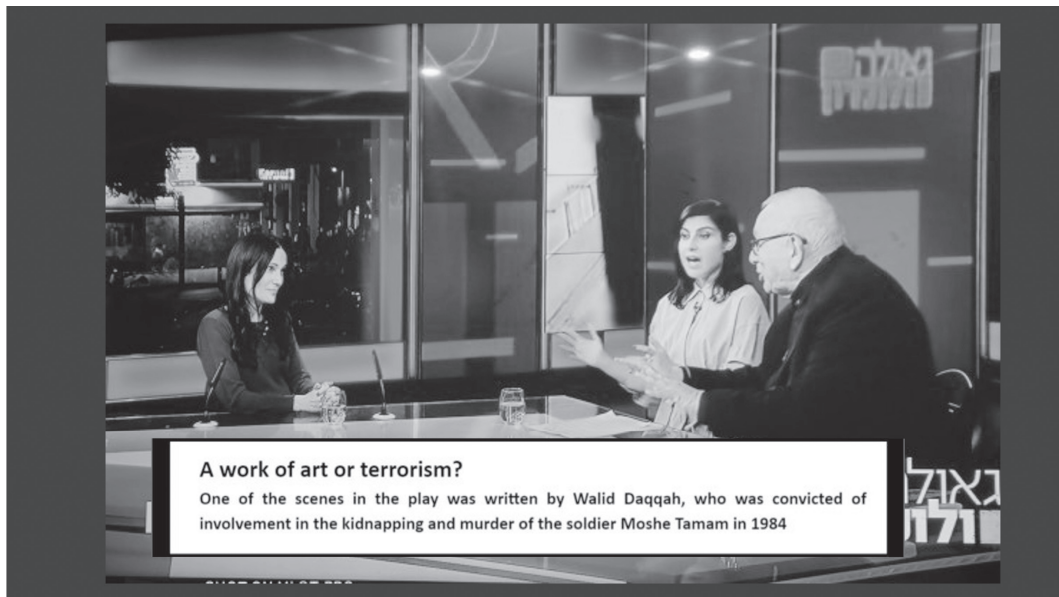
同じ頃、自宅軟禁中のダーリーンにも毎週のように会っていました。女性同士の関係、つながりというのは、心情的に強いものです。そこで、ダーリーンの戦いが男性の戦いよりも入り組んでいることに気がつきました。彼女はイスラエルの占領の他にも、パレスチナ社会の家父長制と戦っているからです。

当時、台本を加筆しつつも『占領の囚人たち』の上演は難しいと思い、助成金への応募も諦めていました。代わりに、ダーリーンについての新しい作品を作ろうと決めました。ダーリーンは刑務所への収監が決まっていたので、私は「私の身体と声をあなたにあげたい」と伝え、自分のユダヤ人としての特権を最大限に活かそうと思いました。パレスチナ人の詩人だから、作品で抵抗を呼びかけて投獄されたわけです。でも私はイスラエル国籍のユダヤ人なので、同じことをしても刑務所に行くことはありません。私に起こり得ることと言えば、演劇が上演禁止になることだとか、ヘイトや脅迫を受けるということだけです。私は自分のこの特権を使う義務を感じました。自分がダーリーンになろうと思ったのです。ダーリーンが私の身体を通して語るようにしたいと考えました。収監前のダーリーンは、あらゆる資料を私にくれ、私は稽古を始めました。すると、テル・アヴィヴのある劇場が上演を許可してくれたのです。ただし、条件が二つ付けられました。一つは、弁護士が事前に台本をチェックすること——ここでいくつか台本に変更が入りました。二つに、宣伝を公にはしないこと——これでメディアを動員することはできなくなりました。ただし、Facebookへの投稿だけは許してもらえました。私は条件を呑み、こうして『I, Daren T. (私は、ダーリーン・T)』を上演したのです。ミリ・レゲヴはこの作

品も上演停止に追い込もうとしましたが、無理でした。

9. 『占領の囚人たち』の上演とバッシング

さらに、政局が緊迫したお陰で、レゲヴが成立させようとしていた「文化における忠誠法」は成立には至りませんでした。この法案の成立にレゲヴが取り組んだことで、文化団体や芸術関係者は萎縮しました。しかし、廃案になったのです。今こそ『占領の囚人たち』を上演する時だと思いました。あらためてテル・アヴィヴの劇場に掛け合い、上演禁止から2年を経て、上演に漕ぎ着けました。少しばかりの変更が加えられましたが、テル・アヴィヴのトゥムナ劇場で上演することができました。



スライド7

上のスライド7に映したのはイスラエルのワイドショーで『占領の囚人たち』が取り上げられたときの一幕です。テロップには、「これはアート作品か、またはテロなのか？」と書かれています。続けて、「ワリード・ダッカが制作に参加。1984年にイスラエル兵士モシェ・タمامを誘拐、殺害」という具合です。どういう経緯からこの番組のスタジオ出演にOKしたのか、もう覚えていません。酷く攻撃されました。私の身体のこわばりからもわかるかと思いますが、もう今にも泣き出しそうでした。全く演劇の話は聞かれず、ずっとテロリストを称賛していると非難されました。

10. 三部作の完成

ダーリーンの出所が決まりました。バーセル・ガッタースも刑務所から出てきました。ワリード・ダッカはまだ収監中です。

私のもとにはたくさんの手紙が来るようになっていました。大きな刑務所から、私に向けられて書かれた手紙です。ワリードからも、バーセルからも、そしてダーリーンからも手紙が来ました。私は、調査のために手紙を集め回ったときのことを思い出しました。いまや、私の元に集ま

る手紙は、私に宛てたものになりました。バーセルとの往復書簡は、イスラエルの雑誌に掲載されました。

『占領の囚人たち』をなんとか数回上演したあと、新型コロナウイルスの感染拡大によるロックダウンになりました。ロックダウンのあいだ、私は台本を書こうとしました。ロックダウンになる前に細々と続けていた活動に、軍事裁判の傍聴があります。これが収監中の囚人に会うための唯一の方法でした。軍事裁判所に通い詰め、裁判システムを題材にした『99.7パーセント有罪』という台本を書き上げようとしていたのです。でも、ロックダウンになってしまい、5分間の短編アニメーションという形で発表することにしました。

この作品は、私の三部作の最後『革命のつくり方』につながっていきます。三部作というのは、『占領の囚人たち』、『I, Daren T. (私は、ダーリーン・T)』、そして『革命のつくり方』です。この三部作を貫くのは、抵抗のあり方です。『占領の囚人たち』では、武力闘争を扱い、『I, Daren T. (私は、ダーリーン・T)』では、私の取り組みにも近接するものとして芸術を通した抵抗を扱いました。最後の『革命のつくり方』では、非暴力の抵抗を考える内容になっています。イーサー・アムルというヘブロンで活動する人権活動家に焦点を当てた作品です。イーサーは、非暴力抵抗に関わる18件の容疑をかけられ、イスラエルの軍事法廷にかけられました。一般的に、軍事法廷は司法取引の場と化して、市場のように刑期や罰則が決まっていくものなのですが、イーサーの裁判は違っていました。イーサーは有名人なので、メディアの報道があり、証人喚問があり、公判があるという具合で、いわゆる普通の裁判の手続きが取られました。なので、私の作品でも、舞台のほとんどを裁判所にしたのです。

11. 絶望的な結論

『革命のつくり方』の最後のセリフが、三部作を通した私の結論です。つまり、パレスチナ人の抵抗は、どのような形であっても合法とは取り扱われないということです。もちろん、武力闘争を行えばテロリストとして扱われます。芸術を通して抵抗を行っても、収監されることになります。さらに、非暴力の方法で世界に対してイスラエルをボイコットしてほしいと呼びかければ、反ユダヤ主義者であると糾弾されます。パレスチナ暫定自治政府のようにイスラエルに屈服したところで、殺されたり、収監されたりすることに変わりはありません。どうしたらよいのでしょうか？ 本当に絶望的な結論です。

私の作品の中でもう一つ重要な点は、必ず演劇のあり方を議論するシーンがあることです。「演劇が果たすべき役割とは何か？」と問いかけます。どう演劇を使うべきなのか、なぜ演劇でないといけないのか、と問うのです。特に『革命のつくり方』では、イーサーが非暴力抵抗について私に語り、私がイーサーに演劇や演劇の役割について語るシーンがあり、この問いが明示されています。イスラエルの一般の人は、軍事裁判所には行きません。でも、劇場には来る。だから、劇場を舞台に、芸術を通してこの暗い現実にも光を当てるのです。

2006年のある爽やかな朝に、私はクローゼットから何気なく一着のシャツを取り出しました。もちろん、政治的なメッセージ性はあったものの、後先を考えない行為であったことは否めません。そのシャツを着たことで、初作品『シェイム (恥)』が生まれ、その後も演劇を作り続けることになろうとは、想像もしていませんでした。

私がお後に受けることになったイスラエル世論の脅しやヘイトが、今やイスラエル社会の多数派になってしまうことにも考えが及びませんでした。自分の演劇が国会での激論の題材になることも想像しませんでした。自分の演劇を上演する、または上演しようともがなくなかで、私は政

治的なプラットフォームを得ることになり、ずっと遠くから敬意の眼差しを向けてきたパレスチナ人の政党に加入することになりました。私個人の転身、シャツをただ着ていた人から劇作家になり、政党の公認立候補者になったこの変容こそが、私の国であるイスラエルの凋落を物語っているのです。

皆さん、どうもありがとうございました。

IV. 対談 エイナット・ヴァイツマン／鈴木啓之

問い掛け(斜体)：鈴木啓之

エイナットさんのお話で、「特権」という言葉がとても印象的でした。私は、特権を持っている、この特権を使ってパレスチナ人の囚人の声を届けるんだというふうに、何度もお話をされていたと思います。ただ、私たち自身を振り返ると、自分の持っている特権に気付くというのは、非常に難しいことです。ここから一つ、エイナットさんに質問をしたいと思います。シャツを着て、そこから人生が変わっていった瞬間についてです。あの時、「何も考えていなかった、ごめんなさい」と謝るといふこともできたかもしれません。しかし、そこで自分自身は占領を見ていく、政治囚たちの声を届けていく、自分の特権を使って現状を変えていきたい、そのように判断されたのはなぜなのでしょう。

確かにイスラエルでは、占領やパレスチナ人の窮状を無視することはとても簡単です。私たちイスラエル人には、パレスチナ人を見せないようにして、見えたとしても人間として見えないように、すべてがデザインされています。私は、ほとんどの人の目に触れないこの不正義を直視することができたという意味で、自分が幸運であったと考えています。そもそも知らないからこそ、相手側のナラティブを知ることは、多くのイスラエル人にとってとても難しいことなのです。パレスチナについて知る機会はありません。学校でも習わないし、メディアでも出てこない話題です。とくにテル・アヴィヴに住んでいるならなおさらでしょう。

でも私は運よく現実を直視することになりました。その経験は2006年よりも前のことでしたが、不正義を目にしたことで、シオニズムの暖かな腕のなかに留まることができなくなりました。もっと知らなければいけないと思うようになりました。抗うことなしに、テル・アヴィヴやイスラエルに暮らすことができなくなりました。抵抗することをやめるとき、私はイスラエルを去ることになるでしょう。

少し付け足しをすると、反植民地闘争では、先住民と共にあるということが絶対に重要です。占領に立ち向かおうとするイスラエル人の多くは、どういう風に抵抗すべきかと指図したがりません。でも、私はこの闘争をパレスチナ人が率いていく必要があると思いますし、私はあれこれ言えるような立場にはありません。パレスチナの人たちの戦いに、謙虚についていき、彼らが何を求めているのかに耳を傾けるべきです。占領に抵抗するのはいいけれども、武力闘争はよくないだとか、ボイコットを手段にしてはならないと言う人もいますが、私は反対です。そういうことではないのです。パレスチナ人の意思というのを尊重すべきだと思っています。私は、1日たりとも占領下に生きていたことはありません。そんな私がパレスチナの人びとに何かを言えるはずがないのです。彼らから学んでいかなければなりません。パレスチナの人びとが私に求めてくれるのであれば、私は出かけていくでしょう。下がっていてくれと言われれば、私は下がるでしょ

う。私に取り組んでいるのは、まさにそういうことなのです。

今回のシンポジウムのテーマが「演劇と抵抗」でした。お話の中でも、文化活動と占領への抵抗がテーマになっていたと思います。しかし一方で、そうした文化活動に対しての非常に大きな圧力が、イスラエル政府からかけられていると述べられていました。

例えば、元イスラエル軍兵士が集まった団体である *Breaking the Silence* の証言活動に対して、海外でイスラエルを誹謗中傷しているという容疑により制限が掛けられるという出来事もありました。イスラエルという国家の名誉を傷付ける活動を国外でするな、というような規制です。エイナットさんの場合では、イスラエル国内での演劇活動が大きな規制を掛けられ、そして今、日本で演劇ができるようになっている。こうした、イスラエル国外での文化活動に関して、エイナットさんご自身はどのような意義を見いだしていच्छいますか。

私が一番重視しているのは、イスラエル国内でイスラエル人の観客に向けて上演することです。また、私の演劇は介入を扱っているので、議論が沸き起こることも重視しています。上演禁止になったり、メディアで騒がれたりすることが重要で、議論が起こることが大切なのです。それはつまり、私の演劇が扱う主題が、イスラエル国内で、ヘブライ語で議論されるということなのです。パレスチナ人が孤独のなかで戦い続けることは不可能です。世界がパレスチナを知る必要がありますし、世界が介入する必要があります。世界が沈黙を続ける限り、この状況も続いてしまいます。イスラエルは、自国の国際的な評判、名声を非常に気にしています。なので、聞き手がいるのであれば、国外で語ることも時には効果的です。ですから、両方の活動が重要なのだと言えるでしょう。いずれにしても、私はイスラエルでの生活に満足したユダヤ人に、彼らの名の下に何が行われているのかを知ってもらおうことがより大事だと考えています。

V. 閉会の辞・解説

新野守広（立教大学教授）

今回の公開シンポジウム会場校を代表して閉会のご挨拶を申し上げます。

多忙な日程を割いてイスラエルから来日された劇作家エイナット・ヴァイツマンさん、貴重なお話を大変ありがとうございました。そして、本日の公開シンポジウムの実現にあたって大きな力添えを頂いた、科研費学術変革領域研究(A)「イスラーム信頼学」B03班「紛争影響地域における信頼・平和構築」研究代表者の立教大学異文化コミュニケーション学部教授の石井正子先生と、司会および対談のお相手を務められた東京大学大学院総合文化研究科特任准教授の鈴木啓之先生、イスラエル演劇の現状とヴァイツマンさんについてお話を頂いた共立女子大学芸学部教授の村井華代先生、通訳を担当された渡辺真帆さん、ならびに会場の設営などを助けていただいた多くの皆さまにあらためて御礼申し上げます。

ヴァイツマンさんが原作を書かれたドキュメンタリー演劇『占領の囚人たち』は、2023年2月26日まで下北沢「劇」小劇場で上演されています。日本人の俳優たちと東エルサレム在住のパレスチナ人俳優で、ベネチア国際映画祭最優秀男優賞を受賞したレバノン映画『判決、ふたつの希望』に主演したカーメル・バーシャーさんが同じ舞台に立ち、日本語と英語とアラビア語が飛び交う多言語の舞台です。字幕も出ます。イスラエル在住のパレスチナ人が日常的に強いられてい

る理不尽な扱いを描いた原作の舞台化にあたって、東エルサレムに滞在して現地の実情を見聞きした日本人俳優たちの体験も盛り込まれており、劇場とは異なるナラティブを生み出して提示する場であるというヴァイツマンさんの考え方を生かした、非常に良い舞台です。

『占領の囚人たち』に続けて『I, Dareen T. in Tokyo (アイ・ダーリーン・ティー・イン・トーキョー)』という作品も上演されていますが、このダーリーンという方は、先ほどから何度もお名前が登場している投獄された女性詩人ダーリーン・タートゥールさんです。日本人俳優の森尾舞さんが演じる一人芝居ですが、森尾さんは現地で実際にダーリーンさんに会っています。舞台では、まず森尾さんが「私は森尾舞です」と自己紹介をしてから、原作中のヴァイツマンさんを演じ、さらに投獄されたダーリーンさんを演じていくというふうに、いわば舞台上の自分自身と原作の二役を次々に成り代わって演じていきます。こうして異なるナラティブが組み合わさる時空間が立ち上がり、それが日本語を通して観客とともに一つの世界を生み出していく中で、イスラエルとパレスチナをめぐる大きな問題が提示されます。その手触りには圧倒されます。翻訳は渡辺真帆さんですが、とてもよくこなれた日本語で、耳で聞いていてわかりやすく、しかも要点をはずさない。演劇として非常に優れた舞台になっていますので、ぜひご覧になってください。

記録を探ると、唐十郎主宰の状況劇場がパレスチナの難民キャンプを訪れて『風の又三郎』を上演したのは1974年でした。以来、日本の演劇がパレスチナを忘れることはなかったと言えます。私が実際に観たものを挙げてみます。

2004年にはラーマッラーに拠点を置くアルカサバ・シアターが東京国際芸術祭に招聘され、『アライブ・フロム・パレスチナ—占領下の物語』を上演しました。アルカサバ・シアターは翌2005年にも来日し、『壁—占領下の物語II』を上演しています。

2007年にはラーマッラーでのワークショップを経て来日したパレスチナ人俳優たちとの合同公演『アザリアのピノッキオ』(作・演出 翠羅白)が井の頭公園の仮設テント劇場で実現しました。

2012年には世界的に活躍するダンサー兼振付家であるヨシコ・チュウマがパレスチナ人ダンサーを東京に招いて共同パフォーマンスを行いました。

2015年には東京演劇アンサンブルがヘブロンのエス・シアターで活動するイハブ・ザーハダを招いて『ミラー』を上演しています。

2017年には、本日のゲストのエイナット・ヴァイツマンさんの作・演出による『パレスチナ、イヤーゼロ』がフェスティバル/トーキョーで上演され、アルカサバ・シアターのジョージ・イブラヒム(ジョルジ・イブラーヒム)が出演しました。

2020年には、今回『占領の囚人たち』を翻訳上演した名取事務所がパレスチナ人作家ガッサーン・カナファーニー原作『帽子と預言者』とラーマッラー出身のラジャ・シャハデ作『鳥が鳴き止む時—占領下のラーマッラー』の翻訳上演を行いました。

イスラエル在住パレスチナ人との共同作業にも関心が払われてきました。2006年にはモハマッド・バクリの一人芝居『悲観楽観悲運のサイド』(原作:エミール・ハビービ)が東京の明治学院大学と京都市内元立誠小学校で実現しています。2012年に蜷川幸雄演出で上演された東京芸術劇場とテル・アヴィヴのカメリ劇場との共同制作『トロイアの女たち』には、イスラエル人俳優と日本人俳優とともに、イスラエル在住のパレスチナ人俳優も出演しました。

他にも、困難を乗り越えて交流を続ける演劇人やアーティストの存在があることを忘れてはならないでしょう。私たちの関心を引き続き高め、維持してくれる活動が続いています。これからも日本側の関心が絶えることはないと思います。今日のシンポジウムは、今後の未来に向けて大きな一歩となる催し物であったと思っております。

長々とお話して申し訳ありませんでした。皆さま、今日は会場が寒くて申し訳ありません。この建物は立教の中でも一番古い建物に属しております。寒かったですね。どうぞ、風邪をひいたりすることのないように。最後にもう一度、ヴァイツマンさんに拍手をお願いします。

本日はありがとうございました。

註

- 1 イスラエルのクネセト（国会）選挙は、全国一選挙区比例代表制で争われ、政党、または複数の政党が連合した選挙リストは、3.25%の最低得票率を上回らなければ議席を獲得することができない。
- 2 2014年7月から8月にかけてガザ地区で行われた軍事攻撃を指す。ヨルダン川西岸地区でのイスラエル人青年3名の殺害にパレスチナ人政治組織ハマスが関与しているとの疑いから、ハマスが拠点とするガザ地区に対する大規模軍事攻撃がイスラエル軍によって実施された。
- 3 1987年に設立されたパレスチナ人の政治組織で、占領地内部で勢力を拡大した。2006年のパレスチナ立法評議会選挙でそれまで政権を担ってきたPLO主流派のファタハに勝利して政権を奪ったが、これを発端として両派は軍事衝突に至り、2007年6月から現在に至るまで、ヨルダン川西岸地区をファタハが、ガザ地区をハマスが統治する状態が続いている。
- 4 イスラエル国内を指す。1948年に起きた第一次中東戦争によって占領された地域（すなわち、ヨルダン川西岸地区とガザ地区を除くパレスチナ地域）をパレスチナ人が指してきた言葉であり、パレスチナ人に連帯する際にもこの呼称が用いられることがある。
- 5 2017年に東京で『パレスチナ、イヤーゼロ』が上演された際のパンフレット等の情報は、フェスティバル/トーキョーのWebsiteで閲覧することができる。https://www.festival-tokyo.jp/17/program/inato_yearzero/index.html（2023年10月22日アクセス）当日のパンフレットに岡真理氏の寄稿が掲載されている。
- 6 1967年の第三次中東戦争によって占領された歴史的パレスチナの一部、つまり東エルサレムを含むヨルダン川西岸地区、ガザ地区を指す。